

16. 猫物語

敦賀市立常宮小学校

5年 河端 里歩 原 彩夏 東 瑞姫

↓

各務原市立那加第一小学校

6年 光崎 愛永 松原 三和 浅野 帆乃香

私はネコのミー。砂沙美ちゃんの家に住んでいるのよ。

砂沙美ちゃんはとってもおてんばなの。砂沙美ちゃんの友達に桃花ちゃん。二人とも元気いっぱい。

私の友達は犬のポーちゃん。とってもやさしいの。晴れている日は、いつもいっしょに遊びに行くのよ。ポーちゃんのかい主は桃花ちゃん。ポーちゃんのところへ行くと、いつもビスケットをもらえるからとってもラッキー☆

ちなみに、私の好物はゼリー。プルル〜としたのがいいのよね！ポーちゃんの好物はなんだと思う？正かいは……おやつシュークリームです。私って物知り〜☆と、かんたんな自己紹介も終わったところで、私のお話を聞いてくれる？

このごろの砂沙美ちゃんったら、私に見向きもしない。ついこの前まで『ミーちゃん』って言ってくれていたのに。前なんか、私のしっぽをふんで、ゴメンも言わなかったの。私、とっても痛かったのに。ポーちゃんは桃花ちゃんにかわいがられている。いいな…。

どうして私は。何があったの……？私、何か悪いことしたかな……。

いや、私、なにもしてない。うん、してない。砂沙美ちゃんが悪いんだ。私は何も悪くない。そうだ、家出しよう！

私は家出した。もう二度ともどらない。

私はいつの間にか、ポーちゃんの家の前に来ていた。

ガラガラガラ……。

あっ、桃花ちゃんが出てきた。大変だ。かくれなきゃ。私は思わず、街灯のかげにかくれた。私ったらストーカーみたい。

「あ〜、これからピアノ教室だ〜。めんどくせ〜」

「ワンワンワンワン」

あ、ポーちゃん。だめ、こっち見ないで。桃花ちゃんに見つかったちゃうじゃない。

「ワンワンワンワン」

「あら、ポーちゃん。おなか空いたの」

「ワンワンワンワン」

もう、ポーちゃん。お願いだからだまってよ。

「あれ、あのネコは砂沙美ちゃんの家でかっているネコのミーちゃんだ」

あ〜あ、ポーちゃんのせいで見つかったじゃないの。

桃花ちゃんはかけよってきて、私をだっこした。

(桃花ちゃん放して〜)

と言っても、桃花ちゃんには「ニャーニャー」としか聞こえないよね。ここでつかまったら、家出にならないじゃない。やりたくないけど……、やるしかない。私は自まんのつめをはりのように出してひっかいた。ごめん、桃花ちゃん。

「きゃ～、何するの。いた～い。ミーちゃんなんか大っきらい」

桃花ちゃんは私を投げ捨てるように放した。

(ごめんね。桃花ちゃん。あ～あ、桃花ちゃんをおこらせちゃった。もう帰るところも行くところもない)

そんなことを考えていたら、雨がポツポツふりだした。

(わ、私のきれいな雨。とりあえずすべり台の下であまやどりでもしよう。早くやまなかな)

気がつくと雨がやんでいて。私の顔も晴れた気がする。

(あ、私、家出したんだった)

私の心の中はまたくもった。

(はあ)

しょんぼりしながら歩き出す。

(ああ、なんで家出なんかしちゃったんだろう。はあ)

二度も大きなため息をついちゃった。空を見上げると虹が出ている。虹にはいろんな色があるのに、私の心はブルー一色。

虹に見とれて歩いていたら、通りの向こうに、散歩中のポーちゃんを見つけた。

「あ、ポーちゃん」

私は走り出した。ポーちゃんめがけて思いっきり。

と、目の前に車が……。

ブーンブーン。

「キャ」★

気がついたら、私は病院のベットにねかされていた。横には砂沙美ちゃんが悲しい顔をしてすわっていた。

(どうしたの)

ときこうとしたけれど、声が出ない。砂沙美ちゃんも声が出ないことを知っているのだろう。

しばらくして私は退院した。

それから毎日悲しい日がつづいた。

今まで友達だったキミちゃん、ノノちゃん、ポムくんからいじめられるようになったのだ。

私が声が出ないから、からかってひどい事を言う。でも、パールちゃんだけは、私を励ましてくれた。

水曜日、砂沙美ちゃんが学校からなかなか帰って来なかった。どうしてなのだろうとネコ文字でみんなにきいてみると、知っているはずの砂沙美ちゃんの事をだれも知らないという。いじめかと思ったが、どうもちがうみたいね。

木曜日、私のもとにネコ文字でかかれた一通の手紙が来た。そこにはこう書いてあっ

た。

『私はまじょのユサといいます。昨日、私、砂沙美ちゃんと会って、あなたが声が出ないことをききました。だからこんな話をしました。

昔、あなたのように、しゃべれない子どもがいました。その子の母親は、ある大きな池に「どうか、子どもの病気を治してください」とお願いしました。すると池から金の魚が出てきて子どもの病気を治してくれました。

これをきいて、砂沙美ちゃんもその池に行きたいといったので、行かせてあげる事にしました。しかし、そこへ行くには長旅になるので、ライオンと、イルカと、ゾウを家来につけることにしました。

四人は今日の朝、私の家を出発しました。そのあいだ、みんなが心配しないように、存在を消しました。しかしあなたには、砂沙美ちゃんの事をおぼえていてほしかったので、きおくを消しませんでした。どうか、心配しないでください』

私はなんだかいやな予感がしたので、一人で砂沙美ちゃんをさがしに行くことにした。夜こっそり家をぬけだして、走った。なぜだか知らないけど、道がわかったの。夜が明けるところには、不気味な家の前に着いた。すると、中から、さけび声が聞こえた。おそるおそるまどをのぞくと、ライオンと、イルカと、ゾウがおりに入れられて、砂沙美ちゃんがシンデレラのようにはたらかされていた。そしてその奥には、やせこけて、鼻がとがっていて、真っ黒のぶかぶかの服を着た、まじょらしきおばさんが、砂沙美ちゃんをにらんでいた。砂沙美ちゃんが、

「クレ様、もうどうか、かんべんしてください」

といったからわかったの。このまじょは手紙をくれたユサさんじゃなくて、悪いまじょクレだという事が。砂沙美ちゃんを助けなきゃ。すると、近くにいた小鳥がまじょのたおし方をおしえてくれた。どうやら、まじょに水をかけるといいらしい。私はこっそりまじょの家へ入った。するとちらっと金色がみえた。金の魚だわ。このまじょの家にあったのね。それなら砂沙美ちゃんを助けるためにも金の魚をもらうためにも、なんとかしてでも、クレをたおさなければ。よし、夜まで待とう。

空に星がかがやき始めた。

私は、まじょの寝室にしりのびこんだ。お、ラッキーチャンス。クレは大きいびきをかいてねている。砂沙美ちゃんに伝えよう、よし、ライオンはネコ科だから、ネコ文字で通じるはず。私はライオンのそばへ行って、ゆかに自分のつめで、

『まじょは、ねている。水をかければたおせる。砂沙美ちゃんに伝えて』

すると、ライオンは人間の言葉を話した。

砂沙美ちゃんは、私の方を見た。

「まあ、ミーちゃんいたのね。わかった。クレに水をかけてみる」

ザバァーン。

砂沙美ちゃんは水をかけた。

まじょは、あわになって消えた。

砂沙美ちゃんはそばにあった水そうから、金の魚を取り出した、そして言った。

「ミーちゃん、これを食べて」

私は金の魚を食べた。そして声を出してみた。

「ニャー」

あ、声が出た。気がついたら、やさしそうなおばさんが立っていた。

「よく、クレをたおせたわね、すごい勇気の持ち主よ。それから、ライオン、イルカ、ゾウ、ありがとね。まだまだ仕事はあるわよ。砂沙美ちゃんとミーちゃんを家まで送ってちょうだい」

それから私たちは、仲良く家へ帰ったのだ。

あれから、だいぶたった。後からきくと、砂沙美ちゃんはへんな王様につかまって、金の魚を手に入れたようだ。しかし、まじょクレにとられたみたい。私の知らない所で、砂沙美ちゃんは私のためにたくさんの苦勞をしてたんだなと思った。そして私たちは、前より仲よしになった。

どうやら、ほかのみんなは、私が車にひかれた事、声が出なかった事、そして、旅した事、みんなわすれちゃったみたい。でも、私と砂沙美ちゃんは、色あざやかにおぼえているから、二人のひみつになったの。

だから、あたしはもう家出なんかしない。したくない。だって家出する理由なんかないんだもん。

私は、ネコのミー。

世界一しあわせなネコ。